

これまででもこれからも、 地域社会に根差した活動を続けるために

川崎市全町内会連合会創立60周年記念——市長対談

川崎市全町内会連合会の設立から60年目を迎える今年、過去10年間を中心に、地域社会の担い手として様々な活動に取り組んできた姿を振り返りながら、町内会・自治会の現在の様子、そして未来への展望について、福田川崎市長と瀧村川崎市全町内会連合会会長に語り合っていました。

★新型コロナウイルス感染症防止対策のもと実施しました

地域 × 発展

川崎市全町内会連合会会長

瀧村治雄

Takimura Haruo

◎たきむら・はるお

1938年生まれ。両親が町内会活動をしていたことから、民間会社を退職後は地元の久地第1町内会の活動に参加。1994年から同町内会の会長を務め、2014年から高津区全町内会連合会会長・川崎市全町内会連合会副会長に就任。高津区安全・安心まちづくり推進協議会会長、高津区自主防災組織連絡協議会会長、高津区交通安全対策協議会会長、高津防火協会会長など各分野で活躍。2012年に環境大臣表彰、2017年に総務大臣表彰、2019年に旭日単光章を受章。2020年3月から第14代川崎市全町内会連合会会長に就任。

60周年を迎え 改めて先人たちに感謝したい

司会 川崎市全町内会連合会も設立から60年を迎えました。まずは、瀧村会長にお伺いしたいのですが、発足から現在までの様子や記憶に残ることがありましたら、お話をください。

会長 川崎市全町内会連合会を結成し、会の発展に努めてこられた多くの先人に心から感謝と敬意を表したいと思います。そして、市長さんを始め市役所職員の方々の温かいご理解をいただき、様々な面でのご支援を有り難く思っております。御礼申し上げます。

全町連は昭和36年に、市内318団体が結成大会に参加し、発足しました。早いもので今年で60周年を迎え、その間、多くの皆様が町内会・自治会の運営に当たってこられ、現在では600を超える団体が全町連に加盟し活動しています。



60年前といいますと、私は社会人になったばかりで、両親は町会の役員を仰せつかっていました。クルマが無い時代でしたので、地元の町会長さんが自転車で配布物を運んでいたり、毎年行われる盆踊りも家庭にある音響資材を持ち寄るなど、準備や開催には多くの苦労があったと聞いております。

こうしたご苦労を想像しますと、本当に頭が下がる思いがします。多くの方々が地元愛ということで、町内会を結成し熱い思いを持って運営してこられたことを思うと、有り難く、そして感謝申し上げているところでございます。司会 先人たちのご苦労や地元愛に支えられ、川崎という街が大きくなって行くと同時に、町内会・自治会も、大きく成長してきたのですね。

市長は、全町連の活動に関して、どのようなことを感じていらっしゃるでしょうか？

市長 まずは創立60周年おめでとうございます。私は市政運営を行う上で、町内会・自治会の協力無くしては出来ないことばかりだと、日々気づかされております。

安全・安心なまちをつくりたいという思いも、行政だけで完結できるものではありません。

町内会・自治会長さんを始め、地域の役員の方々の皆さんによる美化活動やパトロール等の防犯活動、あるいは高齢者の見守りなど、人と人とのつながりや日々の積み重ねが

あってこそのもので、町内会・自治会だからこそ行えると感じています。

60年間という歩みの中で、時代が変わっても、町内会・自治会という組織がしっかりと存在し続けている。これは世界に類を見ない形です。瀧村会長がおっしゃった地元愛があってこそです。全町連の皆様には改めて感謝したいと思っています。

互いに認め合える 良好なパートナーシップ

司会 全町連と川崎市がパートナーシップで結ばれ、共に安全・安心なまちを作っていくためには、互いのコミュニケーションが重要になると思いますが、運営していく上で、行政側と町内会側の連携についてはいかがですか？

会長 市長さんを始め市役所職員の方々も非常に熱心で、町会運営に当たっても様々な面でサポートを頂いています。

どの区を見ても町連と関わりのある職員の方とは上手くコミュニケーションが取れておりまして、スムーズな運営が行えておりますし不満は耳にしたことはないですね。本当に皆さん真面目なんですよ。能力的にも素晴らしい方々が多く、とても尊敬しています。

司会 行政側から見た町内会・自治会とのコミュニケー



川崎市長

福田紀彦

Fukuda Norihiko

◎ふくだ・のりひこ

1972年生まれ。川崎市立長沢小学校・長沢中学校卒業、米国アトランタマッキントッシュハイスクール卒業、米国ファーマン大学（Furman Univ.）政治学専攻（B.A. Political Science.）卒業。1995年6月衆議院議員秘書、2003年4月神奈川県議会議員（2期）、2009年12月神奈川県知事秘書、2010年2月早稲田大学マニフェスト研究所客員研究員、2013年11月川崎市長に就任。妻、長女、長男、次男の5人家族。川崎市宮前区在住。



●司会

神奈川新聞社川崎総局長
和城信行

◎わしろ・のぶゆき

1968年生まれ。大学卒業後1991年に神奈川新聞社入社。川崎多摩支局長、県警記者クラブ、報道部デスク、デジタル編集部長、運動部長などを経て2019年川崎総局長に就任。事件事故、スポーツ報道、デジタル関連の取材が長い。

ションについては、どのように感じていらっしゃいますか？

市長 町内会・自治会活動は暮らしの全般にわたる事柄ですから、政策立案の段階から皆さんのご意見を頂いて、市役所も区役所も考えて進めなければなりません。

そのために、いくつも会議を掛け持ちされている中、何度も各区の区役所に来ていただきご苦労をおかけしているのですが、常に前向きに取り組んでいただき頼もしく思っています。

先ほど職員のことを褒めていただきましたが、コミュニケーション、信頼関係が絶対欠かせないものですし、市政にこの形が組み込まれているということは、風通しの良い運営が出来ているのではないかと考えています。

司会 具体的な支援施策についてお聞かせ願えますか。

市長 平成27年に「町内会・自治会の活動の活性化に関する条例」が施行されて、これは議員立法、議員提案条例で出来たものです。こうした理念を議会の側から作るのとはとても意味のあることだと思います。

市民の総意を体現する議会が、町内会・自治会をもつ

と応援しようということを示し、それに呼応するような形で、私たちもしっかり町内会・自治会と対等なパートナーシップを築けていると思っています。

前回の議会で議決していただきましたが、町内会・自治会への活動応援補助金という形で、町内会・自治会の取り組みをもっと応援して行こうと思っています。

思いやりの気持ちでコロナ禍に立ち向かう

司会 安全・安心というお話が出ましたが、近年の大きな危機といえば新型コロナウイルスの感染拡大がありますよね。

会長 コロナ禍になってからは、各町会で行っていた盆踊りや秋の祭礼、そして子どもを集めてのイベントなどが殆ど開催できなくなりました。それは住民同士の顔が見える関係が薄れてきているということでもあるんですね。

私は「向こう三軒両隣」という言葉が好きなんです。これまでは、いつでも会える環境と関係作りが上手く行っていたんですけど、過去に例の無い状況下ですので、なかなか会えないという不安がどなたにもあったと思います。

しかし逆にこうした時期だからこそ「あの人は大丈夫かな？」と、お互いを思いやる機運が今まで以上に高まってきてまして、地域の安全・安心により目が向くようになり、防犯、防災意識が非常に高くなり、見守り活動を行ったり、可能な範囲内での防災訓練などが今まで以上に多くなったような気がします。

司会 会長がこのようにおっしゃるのは、市長としても心強いと思われそうですが、こうした機運や活動について、市長としてどのように感じられますか？

市長 互いを思いやる、安全・安心という、まず一昨年の風水害を思い出します。あの時は町内会・自治会の役割の大きさを強烈に実感しました。

まず被災後の復興のスピードが違います。町内会・自治会がしっかりしていると、真っ先に動き出し迅速に復興作業が進む。職員が現地に行くと町会の皆さんがもう現地で旗を振ってくださっているんですね。

それを受けて職員も一緒になって進めて行くのですが、地元でなければ分からない地元の人同士のつながりがある、それがいざという時には、命を守る組織にもなるということを実感しました。

会長の言葉をお借りすれば、向こう三軒両隣という日ごろからのお付き合いが、本当に命を守るなと感じました。

コロナ禍になってイベントや活動は縮小されましたが、そ





の中でも色々な活動が起こっているというニュースも私のところに入って来ています。すでにリモートで会議を行っている町会があると聞いた時には、とても驚きました。見守り活動も工夫しながら回って頂いていたり、そうした町会や役員さんが沢山いるのは、本当に心強いと思っています。

「住む」から「暮らす」へ 若い世代の意識が変わって来ている

司会 転入者や若い世代へのアプローチと申しますか、町内会への加入促進や対応等、次の世代に繋がる活動についてお聞かせください。

会長 加入率については、確かに大事だと思いますが、それだけに一喜一憂してしまうのがないのかなと考えています。本当の加入率と申しますか、我々町会役員と一緒に活動してもらえる住民ですね、いざというときに力になってもらえる住民がどれだけいるかが重要なのではないかと感じています。

そのためには、お子さんがいれば子ども会に、若い方なら地域の仲間とスポーツイベントに参加して頂いたり、気軽に仲間に入って互いに気心が知れて、後には役員になってくれる。地域を気に入って住み続け、やがては積極的に町会活動に参加してくれる、そういう住民が増えてくれるのが一番だと思っています。

司会 住み続けるといえば、長く住んでいて現役を引退した元気なシニアも増えて来ていますよね。シニア世代へのアプローチはいかがですか？

会長 そうですね、現役を退いて時間が出来た方には、例えばどの区にもあります老人会に入っただけ、仲間づくりや楽しむことから始めてもらうのが良いと思っています。

私の町会に限って言うと、神社やお宮のお掃除を年に数回、行っているのですが、まずそういう場に顔を出して、皆と一緒に地域のために貢献しているうちに顔なじみに

なり、他の行事や運営にも参加するようになる…そういう方が多いように思います。

司会 こうした新住民やシニアの方へのアプローチに際して、行政でもサポートを行っていると同いしましたが。

市長 はい。まず加入率のお話をすると、データを見てもやはり若年層の加入率が低い、特に家に帰って来て寝てまた出勤するという「住む」という概念の世代ですね。そうではなくて、この地域で「暮らす」という意識に気づいてもらえると、参加意識も変わるのではと思っています。

コロナ禍の在宅勤務やリモートワークによって自宅や近所での時間が増え、家が寝る場所ではなく「暮らす場所」として見直され始めている。その意識の変化は町内会・自治会の重要性をアピールする良い機会なのかもしれないと考えサポートを行っています。

具体的なものとしてはご近所SNS「マチマチ」と協定を締結し地域の情報発信を通じて町内会・自治会と繋がる機会を提供する。また、全町連の役員の方々に監修して頂いて、子どもも読める絵本を作るなどの取り組みを





させて頂いています。

SNSに苦手意識を持たれている町内会・自治会には、役所がプラットフォームになって地域の専門家と町内会・自治会を繋ぎ、情報発信をサポートする取り組みも行っています。

こうした施策は今だからこそ重要と考え、力を入れています。

時代が変わっても 互助の精神は変わらない

司会 今後70周年、80周年とこれからも続いていくためには、何が重要だとお考えですか？

会長 長く存続し活動していくためには、やはりそこに存在する価値が必要になります。町内会・自治会の場合、基本は「互助の精神」だと思っています。

日頃から顔の見える関係を築き、一朝有事の際には皆で助け合う。安心してその地域で暮らすために、一人ひとりが地域社会の一員として互いを思いやる。SNSやデジタル機器がどんなに発達しても、やはり人間は一人では生きていけません。皆で「明るく暮らしやすい地域社会の実現を目指す」という思いを持った方々が、活躍できる場としての町内会・自治会はこれからもずっと必要なものだと思っています。

個人的な感想になりますが、町会活動として、昔から続いている伝統的な行事、地域の文化といえますか、そうしたものもずっと継承してもらいたいですね。

市長 瀧村会長の話を聞いていて、まったく同感だと思いました。私は「寛容と互助の精神で」が大事だとよく話しているのですが、川崎はもうすぐ市制100周年、100年前と比べて人口が30倍以上の街になったのも、寛容で互助の精神があったからではないかと思っています。

出身、年代、地域を問わず、新し

く暮らし始める方々を寛容な心で受け止めて、そしてお互いが助け合っていく精神。これは川崎の発展そのものの精神だと思います。

それが一番身近なところで行われているのが、町内会・自治会活動です。町内、徒歩15分圏内の安心感、ここに住んでいると安心が得られるという仕組みこそ、互助の精神を持った町内会・自治会であり、それがまちの価値にも繋がっていると思っています。

会長 自分たちのまちは自分たちで守り、そして自分たちで出来ることは何かと考える。こうしたことは地元の力だけでできるものではありません。やはり行政という大きな力が必要で、これからも今のような良いパートナーシップのもと、タッグを組んで川崎の発展のため、もっと住みよいまちづくりのために、ご指導お力添えを頂ければと願っています。

司会 市長から町内会・自治会にメッセージがあればお願いします。

市長 全町連の皆様、単会の町内会・自治会の皆様、60年間にわたって運営された歴代役員の方々に、心から感謝を申し上げたいと思います。そして現職の役員の方々に敬意を表したいと思います。

町内会・自治会活動は通常の仕事とは違って、一年365日、毎日地域のことを思って活動されているわけですから、並大抵のことではないと思っています。単なる義務感だけで出来るようなものではありません。まさに地域愛、地元愛によるところが大きく、本当に感謝しております。

